

# マザーグースの魅力

——メロディ、ライム、そしてリズム——

鷺津 名都江

内容の豊富さ、ジャンルの広さ、シュールな表現などマザーグースへの興味は尽きませんが、シンポジウムのテーマ「音で魅せるマザーグース」が示すように、目で読んで楽しむというよりも音声化された音やリズムを感じた上での中味の面白さこそが、マザーグースの最たる魅力ではないでしょうか。このことはベツジェマン (Sir John Betjeman) <sup>1)</sup>をはじめオーピー夫妻 (Iona and Peter Opie) <sup>2)</sup> など **native English speaker** たちも異口同音に、当然のように口にしますが、日本では音声化されたマザーグースの重要性に対する認知度は低いと言わざるを得ず、まだまだ研究も少ないのが現状です。

そこで本稿では、マザーグース絵本や遊戯書、楽譜を参照し、併せて幕末から明治期の英語教育の現場などでマザーグース教材をどのように利用してきたかを検討し、マザーグースの音声的側面の実態や魅力を探求していきたいと思います。

## マザーグース楽譜集

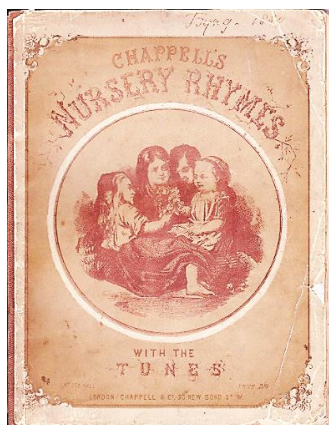
日本語訳としてしばしば“英国伝承童謡”という言葉が使われているためか、「マザーグースは歌であり、必ず曲が付随する」と考える日本人が多いようですが、イギリスでの呼称“Nursery Rhymes”という言葉が示すように元来押韻詩であり、マザーグースすべてに曲が付いているわけではありません。また、マザーグースの音楽的側面の研究も未だ少ないのが実情です。

おそらく、ハンコック (Cecily Raysor Hancock) がオーピー夫妻の『伝承童謡辞典』新版 (1997、以下 *ODNR* と略す) に寄せた論考 <sup>3)</sup> が、マザーグースの曲に関する研究の出発点と言えるでしょう。幸い、ハンコックや *ODNR* の中で参照している楽譜集・遊戯集等の多くが手元にあるので、それらの資料を検討し、現代でも歌われているメロディと比較しながらそのルーツや特徴を探ってみることにします。

ホームズ (Martin Holmes) が ‘the first collection of rhymes to be published with music seems to have been *A Christmas Box — Set to music by Mr. Hook.*’ <sup>4)</sup> (p. 95) と述べているように、*A Christmas Box* <sup>5)</sup> (1796) の出版までマザーグース楽譜集、あるいは楽譜付マザーグース絵本・ナーサリー・ライム集の印刷物は確認されていないようです。しかもこの楽譜集は、ホームズがまったく新しく作曲した二声あるいは三声で歌うためのピアノ伴奏付き重唱曲であり、その後も再版を重ねていることからかなり売れたのであろうとも推

測していますが、ホームズの旋律の痕跡はその後どこにも見当たらず、一過性のものであり、伝承童謡という意味では検討に値しないと考えられるので、ここでは省略します。

19世紀半ば過ぎには、ピアノ伴奏付き48曲が収録された楽譜集 *Chappell's Nursery Rhymes*<sup>6)</sup> (1864、以下 *Chappell's* と略す) が出版されました。編纂者のリンボールト



*Chappell's Nursery Rhymes*

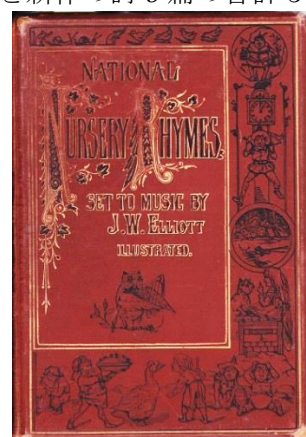
(Edward F. Rimbault) が前書きで「多くの素晴らしくて可愛いメロディが書き留められることなく消えていくのが残念で、よく知られ、子どもたちを楽しませている歌を楽譜におこし、20年前に小さなナーサリー・ライム楽譜集を出版した。それ以来書き留めた曲の数が増えたので、今回新たな曲集として私の可愛い友達の皆さんにお届けしよう」と述べていることから、この曲集は伝承童謡楽譜集として出版されたかなり初期のものと考えられます。

ハンコックが参考資料として '*Rimbault's Nursery Rhymes* (1846)' の名を挙げ、「副題に 'with the Tunes to which they are Still Sung in the Nurseries of England.

Obtained Principally from Oral Tradition' とある」(註3、p. 46) と記載していますが、これが *Chappell's* の前書きにある「20年前の小さなナーサリー・ライム楽譜集」であろうと思われます。そして、*Chappell's* の副題にも 'with familiar tunes for voice and pianoforte' とあることから、リンボールトの曲集は伝承のメロディを収録していると言えるでしょう。そして、その大多数の曲が現代でも耳にするメロディであることは、驚きでもあります。

*National Nursery Rhymes and Nursery Songs*<sup>7)</sup> (1872、以下 *NNRN* と略す) は、イギリスの作曲家エリオット (J. W. Elliott) がマザーグース45篇と新作の詩9篇の合計54篇に、新たに曲をつけた曲集です。

出版社による前書きには「エリオットが自分の子どもに実際に歌わせて、子どもの音域に合い、しかも子どもが歌いやすく覚えやすいような曲にした」<sup>8)</sup> (pp. 171-75) と記されており、全作品がエリオット作曲であることが分かります。この楽譜集は同年、アメリカでも *Mother Goose, or National Nursery Rhymes and Nursery Songs* と、「Mother Goose」が付け加わったタイトルで出版されています。

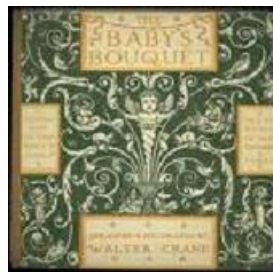


ホームズ後も現代までレスリー (Henry Leslie)<sup>9)</sup>、ラッセル (Mary Annette Beauchamp Russell)<sup>10)</sup>、ムーラット (Joseph Moorat)<sup>11)</sup> など多くの人がマザーグースの詩に新たな曲をつけて出版してきましたが、ほとんどのオリジナル作品は浸透しませんでした。しかし興味深いことに、エリオットの曲集はイギリスでは再版や復刻版が見当たらないにもかかわらず、アメリカでは

“Mother Goose” という言葉を冠した若千異なったいくつかのタイトルでその後も数社から出版され続け、アメリカで定着しました。また後で述べますが、このことがアメリカとイギリスで異なるメロディが定着した要因の一つであると思われます。



*The Baby's Opera*



*The Baby's Bouquet*

*The Baby's Opera* (1877、以下 *Opera* と略す) と続いて同年に出版された *The Baby's Bouquet* (以下 *Bouquet* と略す)<sup>12)</sup> は、クレーン (Walter Crane) の代表作の2冊で、マザーグース各36篇の絵と楽譜が一体となった魅力的な絵本です。幸い、当時を代表するイラストレータであり絵本作家の作品であったからか、現代まで何度もそのまま、あるいは形を変えて復刻されており、マザーグースのメロディを知る上でも重要な絵本となっています。



*Games and songs of American Children*

先発の *Opera* には、音楽に関する記載は ‘the music by the earliest masters’ としかありませんが *Bouquet* には表紙に ‘a fresh bunch of old rhymes & tunes’、中表紙には ‘The tunes collected & arranged by Lucy Crane’ との記載があり、メロディに関してはクレーンの姉のルーシーが担当していたことが分かります。*Chappell's* のメロディと比較的同じものが多く、当時定着していたメロディであると考えてよいでしょう。

19世紀に遊戯歌としての観点から採集されたメロディは、*Games and songs of American Children* (1888、以下 *GSAC* と略す) と *Children's Singing Games, second series* (1894、以下 *CSG* と略す) の中で見つけられます。と同時に、英米両国での遊び方が楽譜や解説とともに記載されており、当時子どもたちの遊びの実態も知ることができます。

*GSAC* はアメリカの子どもたちの伝承遊びの研究書で、「子どもたちの遊びの場で採譜したメロディの多くは、ピアス (S. Austen Pearce) の手によるものである」(p. vi) と、編纂者の言葉としてニューエル (William Wells Newell) は述べており、イギリスやヨーロッパ大陸との関

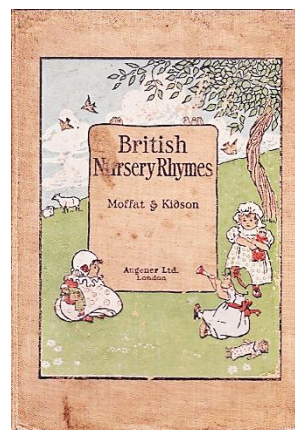


*Children's Singing Games, second series*

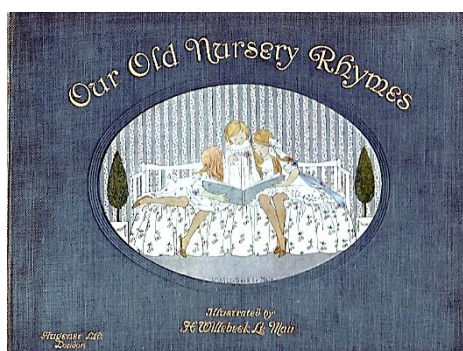
連や影響への言及も興味をひくところでは。

一方、イギリスの子どもたちの遊びを収集したゴム (Alice B. Gomme) は、1894年に8曲ずつのピアノ伴奏付き楽譜、遊び方、それに簡単な解説付きの遊戯書を2巻出版しました。その2巻目が *CSG* です。アメリカの遊び歌とリンクしているところも見られ、取り上げている数は多くありませんが、興味深い1冊です。

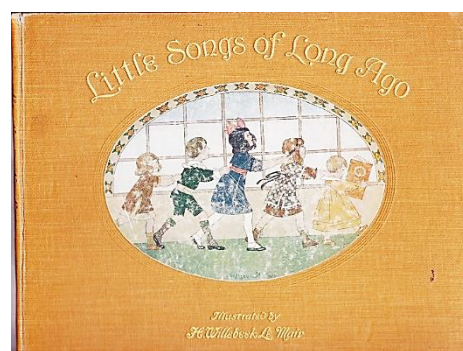
20世紀に入ると、イギリス民俗音楽学者で英国フォークソング収集家の草分けでもあったキドソン (Frank Kidson) 編纂の *British Nursery Rhymes*<sup>15)</sup> (1904、以下 *BNR* と略す) が出版されました。キドソンが前書きで「この本を手にする大人の興味を引くかもしれないと思い、ところどころに解説をつけた。またメロディは、常にその詩に付随して親しまれてきたものに、私の助手のアルフレッド・モファット君が子どもの手で弾けるようなピアノ伴奏譜を付けた」(p. 6) と述べているように、詩やメロディについての簡単な注釈が、かなりの曲についています。*ODNR* でも詩に関しては大いに参照していますが、曲のルーツに関しても大変参考になります。また「モファット君」とは、キドソンの助手として若いころから多くのキドソン編纂イギリス民俗音楽楽譜集の編曲を手がけてきた Alfred Moffat のことで、後に彼自身もイギリス民俗音楽研究家として名をなした作曲家です。



*British Nursery Rhymes*



*Our Old Nursery Rhymes*



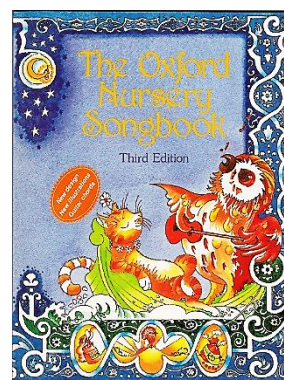
*Little Songs of Long Ago*

*BNR* が契機となったのか、モファットはその後も絵本作家ル・メール (H. Willebeek Le Mair) の代表作 *Our Old Nursery Rhymes*<sup>16)</sup> (1911、以下 *OONR* と略す) と *Little Songs of Long Ago*<sup>17)</sup> (1912、以下 *LSLA* と略す) の楽譜編曲も担当しています。横A4判の大きさのこの楽譜付き絵本は、見開きの左ページにル・メールの優しい色合いの絵が、右ページにはメロディ譜と共に *BNR* よりもさらに簡単な左手伴奏が付けられた楽譜が配置され、各30曲ずつ、2冊で計60曲収録されています。メロディは *BNR*、クレーンの2冊、*Chappell's* と共通または準ずるものがほとんどで、キドソンの薫陶を受けていたモファットだけあり、この曲集も伝承のメロディを収録していると言えます。ル・メールの絵は人気が高く、この

後も小型版、分冊版などに形を変えて繰り返し出版されましたが、楽譜ページはクレーンの絵本のような意匠を凝らしたものではなかったためか、後発本はいずれも楽譜は割愛され、詩のみがプリントされた絵本になってしまっており、残念です。

1933年の初版以来現在まで版を重ね、ハンコックも資料の一つに挙げている *The Oxford Nursery Song Book* (1933、以下 *ONSB* と略す) は、数多くの子どもの歌楽譜集が出版されるようになった今日でも、標準的な現代の子どもの歌楽譜集の一つと言えるでしょう。

手元にある3版<sup>18)</sup>にも、編纂者バック (Percy Buck) の「この曲集を見て、‘自分の知っているメロディや詩ではない’ と言う人もいると思うが、曲についても詩についても、子どもや大人に歌われているもの、あるいは出版物を参照して選んだ」との初版に寄せた短い前書きが掲載されており、当時口ずさまれていた伝承の子どもの歌を選んだという姿勢が示されています。収録 108 曲の 9 割近くはマザーグースですが、中には「アヴィニョンの橋で」などのフランスの歌や現代の子どもの歌も数曲散見されますし、版を重ね続けているということから、この楽譜集収録のマザーグースのメロディは現代にも通用しているものである、と考えていいのではないのでしょうか。



*The Oxford Nursery Song Book*

次の項では数編のマザーグースを取り上げてこれらの楽譜集を検証し、曲の差異あるいは曲についての解説などを参考に、マザーグースのメロディのルーツを紐解いてみましょう。

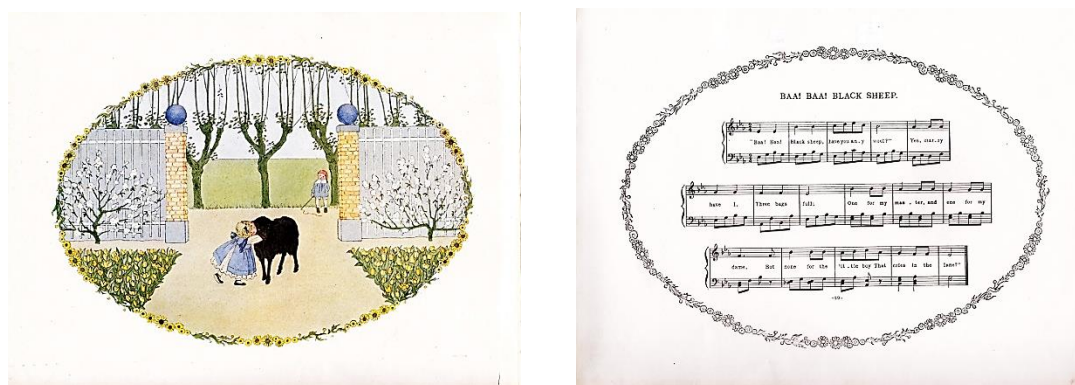
### マザーグースのメロディ

“Twinkle, Twinkle, Little Star” “London Bridge” “Mary had a Little Lamb” は日本人にも子どもの英語の「歌」として知られており、その詩はメロディとともに口にされることがほとんどです。しかも大方の人は、その詩に付随して覚えたメロディはそれが唯一のものと信じ、疑うことはまずありません。しかし、一つのマザーグースにいくつものメロディが存在することは決して珍しいことではありませんし、“英国伝承童謡”と言われても、メロディもイギリス生まれとは限りません。

英語圏の人たちに親しまれて、最も有名な英語の四行詩の一つと言われる “Twinkle, Twinkle, Little Star” は、イギリスの女流詩人ジェーン・テイラー (Jane Taylor) が 1806 年に ‘The Star’ と題して発表した 5 連からなる詩です。子どものころに手をキラキラさせながらこの歌を歌ったことのある人も多く、稀に日本の子どもの歌と思っている日本人もいますが、大多数はイギリスの歌と思っているようです。

しかし現在知られている曲はイギリス生まれではなく、フランス生まれの曲です。18 世紀後半にフランスで流行した俗謡 “Ah! Vous dirais-je, Maman (ねえ！話したいのよ、マ

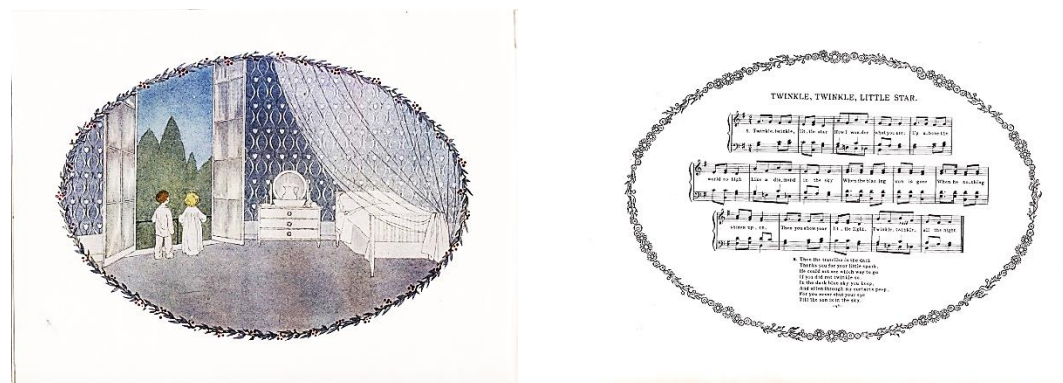
マ!)”と、同時代から歌われているフランスの伝承童謡“Quand Trois Poules (三羽のメンドリ)”が、同じこのメロディです。どちらの起源が古いのかは定かではありませんが、日本では「きらきら星変奏曲」として知られているモーツァルトの曲の原題も“Ah! Vous dirais-je, Maman”で、このメロディが下敷きになっていますし、サン=サーンスの代表作「動物達の謝肉祭」の中にも他のフランス民謡と併せてこのメロディが登場します。当時のヨーロッパで大変広まっていたメロディであったことは間違いなく、いつの間にか英語のアルファベットの歌に借用されて英語圏にも広まり、“Twinkle, Twinkle, Little Star”や“Baa, Baa, Black Sheep” (資料1 参照) もこの旋律で歌われるようになりました。



資料1 *Our Old Nursery Rhymes* pp. 28-29

OONRには“Twinkle, Twinkle, Little Star” (資料2 参照) も収録していますが、よく知られているメロディとはまったく異なっています。

どうもイギリスではこのメロディが先に定着したようで、BNRにもこのメロディが掲載されています。何となく臉が重くなりそうなこのメロディは、BNRに‘The air is “the Spanish Chant”’ (p. 54) との註があり、スペインの聖歌に由来しているとのこと。またこのメロディの“Twinkle, Twinkle, Little Star”を、筆者が1986年の英国留学以来収集したテープやCDコレクションの中で複数耳にしたことは、このメロディが20世紀初頭ばかりではなく、圧倒的にフランスのメロディが定着した現代でも、未だ命ながらえている証と言えるようにも思われます。



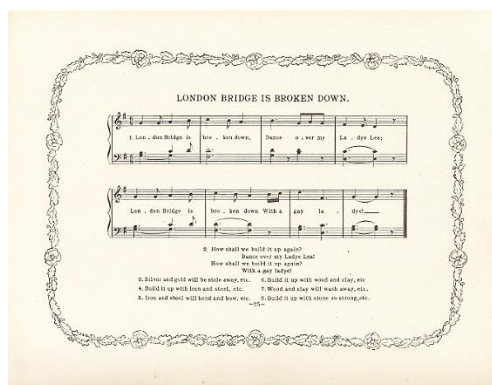
資料2 *Our Old Nursery Rhymes* pp. 46-47

“London Bridge”の歌も、現在知られている遊び歌とは歌詞もメロディも異なったLSLA

所収の歌（資料3並びに下記①参照）が、*Chappell's*や*ONSB*に掲載されていますし、テープやCDにもかなり登場しますので、遊び歌で知られる“London Bridge”の古いバージョンというよりも、現在でもかなり浸透している別バージョンという印象をもちます。

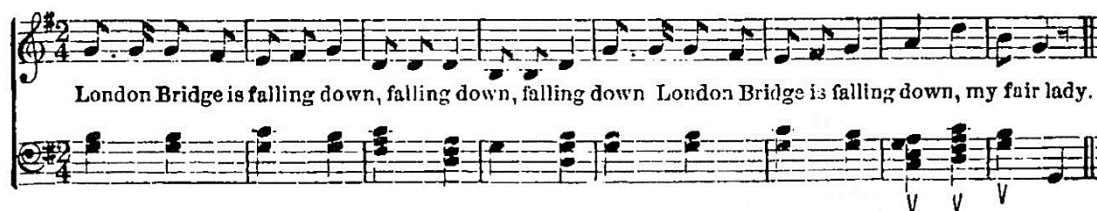
① London Bridge is broken down,  
Dance over my Lady Lea;  
London Bridge is broken down  
With a gay Ladye!

② London Bridge is falling down,  
Falling down, falling down,  
London Bridge is falling down,  
My fair lady.



資料3 *Little Songs of Long Ago* pp. 24-25

資料3に登場する①のバージョンに関しては、18世紀初頭のダンス曲“London Bridge”としてダンスの本に登場し、*Tommy Thumb's Pretty Song Book* (c. 1744) に収録されています（*ODNR*、pp. 319-20）。またアメリカでは‘London Bridge’の部分のみが‘Charlestown Bridge’となり、子どものパーティー開始時に男女一人おきに円をつくって踊る曲として紹介されています（*GSAC*、p. 206）。つまりは、遊び歌“London Bridge”と異なるダンス曲“London Bridge”が存在すると思った方がよいかもしれません。



資料4 *Games and Songs of American Children* p. 209

また*GSAC*には、16世紀からヨーロッパ中で“Fallen Bridge”という遊びがあり、アイルランドでのその遊びがアメリカへ入って“London Bridge”として遊ばれている、と採譜楽譜（資料4参照）とともに記載されています（pp. 205-11）。歌詞は完全に②のバージョンです。メロディは耳慣れたものと大部違ってはいますが、現在の曲をイメージできるものになっていることも確かです。

さらに追記記載（pp. 253-54）のメリーランド州バージョンの楽譜（資料5参照）を見る

と、最終部の歌詞が ‘Down so merrily’ となつてはいるものの、最後の2小節以外はすべ



資料5 *Games and Songs of American Children* p. 253

て現在歌われているメロディです。そして、アメリカで採譜された資料4の歌詞全部と最後2小節のメロディを、資料5の6小節目までのメロディに重ね合わせれば、現在の“London Bridge”の歌になります。

CSGにもこの遊び歌の楽譜が掲載されており(資料6参照)、おそらく、イギリスにおける遊び歌“London Bridge”の楽譜としては、これが初登場ではないかと思われます。歌詞の‘falling down’がすべて‘broken down’であること、付点がないこと、最終小節のメロディのみの違いを除けば、GSAC記載のものよりずっと現在の遊び歌に近くなっています。



資料6 *Children's Singing Games, second series* p. 15

これまで、遊び歌としてはイギリスでも圧倒的に‘falling down’で歌われているにもかかわらず、なぜ出版されているマザーグース絵本や詩集では‘broken down’が多いのか、疑問に思っていました。しかし、イギリスのダンス曲がアメリカでアイルランドからの遊びと結びつ



資料7 *The Oxford Nursery Song Book* p. 52

いて‘falling down’の形に転化し、さらに遊び歌として逆輸入されてイギリスに定着したと考えれば、詩とし収録される場合はオリジナルの面影を残す‘broken down’が多いことも頷けます。また、ダンス曲としての“London Bridge”と遊び歌としての“London Bridge”という二つの歌が現代でも併存していることにも納得できます。

現代のイギリスの楽譜集やCDの音源には、“Mary had a Little Lamb”も日本でほとんど知られていないメロディ(資料7参照)がしばしば登場しています。OONRにも同じメロディが作曲者の記載なく収録されており(p. 47)、あたかも伝承曲のような扱いですが、これは1830年代、アメリカの賛美歌作曲歌として有名なメイソン(Lowell Mason)の手によるもので



す。詩の発表後すぐに作曲されて楽譜が出版され、それがイギリスへ渡って定着しました。

しかしアメリカではこの詩が教科書に掲載されるようになり、いつのまにか“Good-Night, Ladies”の後半部分‘Merrily we roll along ~’のメロディ<sup>19)</sup>(資料8参照)で歌われるようになり広まりました。

“Good-Night, Ladies”は、ミンストレル・ショウのスターであったクリスティ (Edwin P. Christy) が前半部分を作詞作曲し、1847年に楽譜を出版しています。その後アメリカ各地、そしてイギリスにもツアー興行してミンストレル・ショウで歌われるう

Good-Night, Ladies

Sotto voce

1 Good - night, la - dies! Good - night, la - dies! Good - night, la - dies! We're going to  
2 Fair - well, la - dies! Fair - well, la - dies! Fair - well, la - dies! We're going to  
3 Sweet dreams, la - dies! Sweet dreams, la - dies! Sweet dreams, la - dies! We're going to

Allegro

leave you now: Mer - ri - ly we roll a - long, roll a - long, roll a - long. O'er the dark blue sea.

Ritard. molto. Repeat pp

資料8 *The One Hundred and One Best Songs*

ちに、流行曲となり、資料8に見られるような完全版になり、その完全版楽譜は1867年に出版されました。この後半部‘Merrily we roll along ~’の軽快なメロディの方がメイソンのオリジナル曲よりも詩にピッタリと思われたのか、今では「メリーさんの羊」と言えばこのメロディを思い浮かべる人が大多数となりました。これも伝承のおもしろさです。さらに、メイソンのオリジナル曲がアメリカではすっかり忘れ去られたのに、イギリスでは生き延びている痕跡があるのも興味深いところです。

これとはまったく反対の現象が、イギリスの作曲家エリオットの曲で起きています。前項でも述べたように、エリオットのオリジナル曲はイギリスではほとんど伝承のメロディに掻き消されてしまっていますが、*NNRN*に発表された多くの曲(“Jack and Jill” “Sing a Song of Sixpence” “Hickory, Dickory, Dock” “Hey, Diddle Diddle” など)がアメリカの地で浸透し、歌われ続け、今日でも生き残っています。しかも、現代の楽譜集では作曲者エリオットの記載がないケースがほとんどで、まるで伝承のメロディであるかのように扱われています。最近ではイギリスでもアメリカの影響か、楽譜集やCDなどにエリオットの曲が登場することもあります。伝承のメロディに比べればその割合はまだ低いのですが、逆輸入と考えてよいでしょう。

実は長い間、一つのマザーグースにイギリスとアメリカで普及している伝承のメロディがまったく異なるのはどうしてなのか、疑問に思っていました。イギリスの曲は概して音域が狭くて起伏が少なく、大方は単純なメロディであるのに対して、アメリカの曲はメロディアス、言い換えれば音楽的であることが多いのです<sup>20)</sup>。ところが12年ほど前に偶然 *NNRN* を手に入れ、アメリカで歌われている伝承曲と思っていた多くがエリオットの作曲であることが判明し<sup>21)</sup>、自然発生的なメロディと比較して音楽的な旋律であったことも納得できました。

マザーグースの詩に多くのバージョンが存在し得ることは周知のことですが、伝承とい

う性質上メロディに関しても、言葉以上にいい加減とも言えるほどバリエーションが多彩で、一つの詩に複数のメロディが存在していたり、部分的に違う節やリズムで歌われていたり、逆に複数の詩に同じメロディが使用されていたりと、大変柔軟性に富んでいます(註 20、pp. 104-06)。

そしてここまで検討してきた楽譜の資料などを総合して考えると、マザーグースのメロディのルーツとして、およそ次のように分類できます。

1. 自然発生的な伝承のメロディ
2. ダンス曲、フォークソングなどの一部、または全体を借用
3. 外国曲の一部、または全体を借用
4. 特定の作曲家のオリジナル作品

もう一つの音楽的基本要素のリズムに関しては、日本のわらべうたには皆無の 6/8 拍子や 12/8 拍子が多用されており、これは言語リズムと深い関係があることは『わらべうたとナーサリー・ライム』<sup>22)</sup> (pp. 115-41) でかなり検討しているのでここでは省きます。しかし、歌においても英語の強弱リズムがその音楽リズムに深く影響を及ぼし、メロディにも増してマザーグースの魅力となっていることは言うまでもありません。

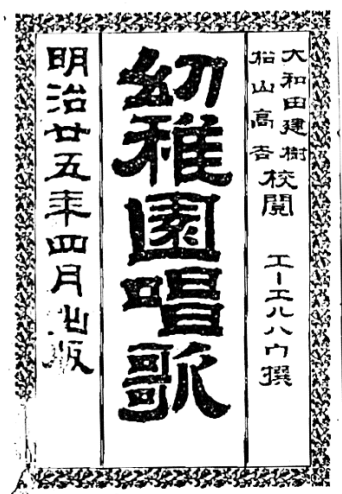
次に、言語リズムや押韻の音声化によるマザーグースの魅力が、いかに英語教育において重要な役割を担う可能性があるかということ、明治・大正期の英語教育を振り返ることにより検証してみましょう。

### 明治期の英語教育とマザーグース

明治 20 年にアメリカから来日した宣教師のハウ (Annie Lyon Howe) は、日本の幼児教育の基礎を築いた人です。明治 25 年には日本の子どもたちのために、当時のアメリカの子どもたちが歌っていた曲を集めて『幼稚園唱歌』<sup>23)</sup> (資料 9 参照) を出版しました。この楽譜集にはマザーグースとの明示はありませんが、「きらきら (Twinkle, Twinkle, Little Star)」(資料 10 参照)、など 4 篇が日本語訳の歌詞で収録されています。マザーグースの出版楽譜としては、日本初登場です。そして興味深いことに、この 4 曲とも作曲者は明記されていませんが、*NNRN* の中で見つけることができ、エリオットの曲と判明しました。このことは、アメリカにおけるエリオットのメロディの浸透の凄さを証明しているとも言えます(註 21、p. 18)。

またハウは、来日当初から幼児教育の現場でマザーグースを歌っていたことが、長じて英語教師になった当時の生徒の話で確認できました。つまり日本の幼児教育の黎明期に、すでに子どもたちが英語のマザーグースの洗礼を受け、英語のリズム感の基礎を身につける機

会があったと言えるわけです<sup>24)</sup> (pp. 18-19)。

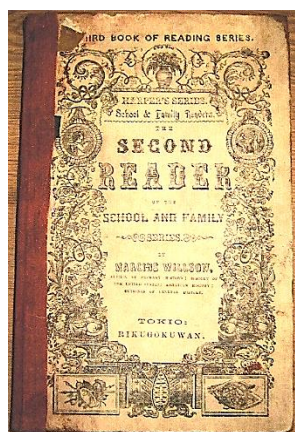


資料9 『幼稚園唱歌』

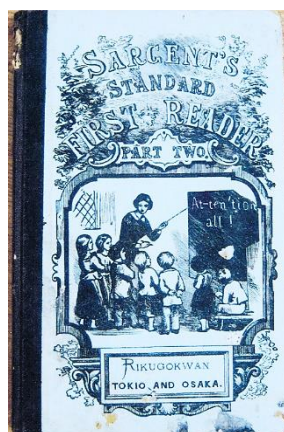


資料10 『幼稚園唱歌』 p. 77

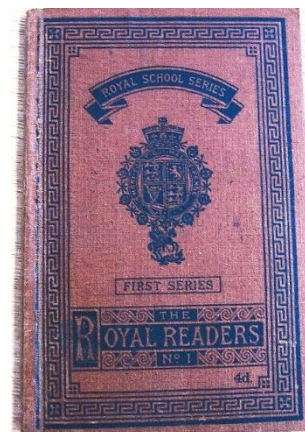
幕末から明治時代の英語教科書としては、アメリカやイギリスから『ウィルソン第二リーダー』<sup>25)</sup> (資料11参照)、『サージェント第一リーダー第二部』<sup>26)</sup> (資料12参照)、『ロイアル第一リーダー』<sup>27)</sup> (資料13参照) などが<sup>28)</sup> (pp. 3-19)、また現物こそ見つかっていませんが翻刻版<sup>29)</sup> や参考書<sup>30)</sup> などからは慶応2年にはすでに初心者向き『サージェント・リーダー第一リーダー第一部』が日本に入ってきていたことが確認できますし、教科書によって所収されている内容は異なるものの、“Twinkle, Twinkle, Little Star”などのマザーグースが散見されます<sup>31)</sup> (pp. 147-51)。



資料11



資料12

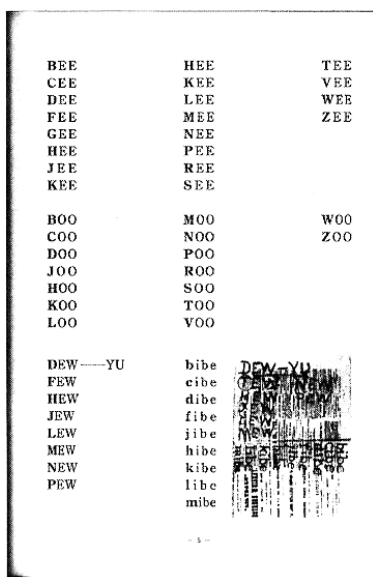


資料13

『ウィルソン・リーダー』 『サージェント・リーダー』 『ロイアル第一リーダー』

その後の輸入英語教科書の中にもマザーグースが登場するものがありますが、多くの場合、読み物というよりも暗誦用教材として所収されており、英詩をリズムカルに‘chant’させることを目的としています。

小泉八雲ことラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn) も、明治の日本で長男の一雄に英語を教える際にはまず言葉の意味よりも英語の音や押韻の感覚、そしてリズム感



資料 14 『小泉八雲父子練習帳』 p. 5

を身につけさせるような教育をしています。長男が 5 歳の時から始めた英語の授業の最初の 1 年間は、アルファベットのつながりと発音との関係が分かるように、単語というよりも BAB, DAB, CAB, FAB, GAB とか ANG, ENG, ING, ONG, UNG など、韻を踏む音の羅列を英字新聞に書いて作った教材<sup>32)</sup>(資料 14 参照)を使用し、まず音や押韻の感覚を身につけさせました。絵本や詩の本を読ませるようになったのはその後です。その中の 1 冊 *The Nursery Rhyme Book*<sup>33)</sup> は、マザーグース収録総数 333 篇のかなり部厚い本ですが、ハーンはまず音読させ、音読が完全にできると次にはピッタリの訳を考えさせ、ほぼ全篇に目を通させたそうです。

また一雄がハーンから教えられた英語の子守歌“Bye, Baby Bunting”を口ずさんでいると、そばで聞いていたお手伝いさんが語呂の似た、でたらめな日本語の文句を当てはめた次のような歌を、得意気に歌うようになりました。

Bye, baby bunting,

ババ、ベベ、<sup>はんでん</sup>半纏、

Daddy's gone a hunting,

<sup>だてまき</sup>伊達巻や<sup>はんぺん</sup>半平

To get a little hare's skin

<sup>つげぐし</sup>黄楊櫛や<sup>へいき</sup>平気

To wrap a baby bunting in.

<sup>つら</sup>面パンと<sup>ぶ</sup>打ちまえ

この傑作を聞いたハーンは、このでたらめ歌を歌うことを禁上したそうです。しかし声に出して両者を比較してみると、原詩の韻や英語のリズムが非常にうまく日本語に置き換えられています。お手伝いさんの耳の良さにも感心しますが、一雄が英語のリズムや韻のおもしろさをきちんと表現できていたからこそと思います(註 24、pp. 28-37)。

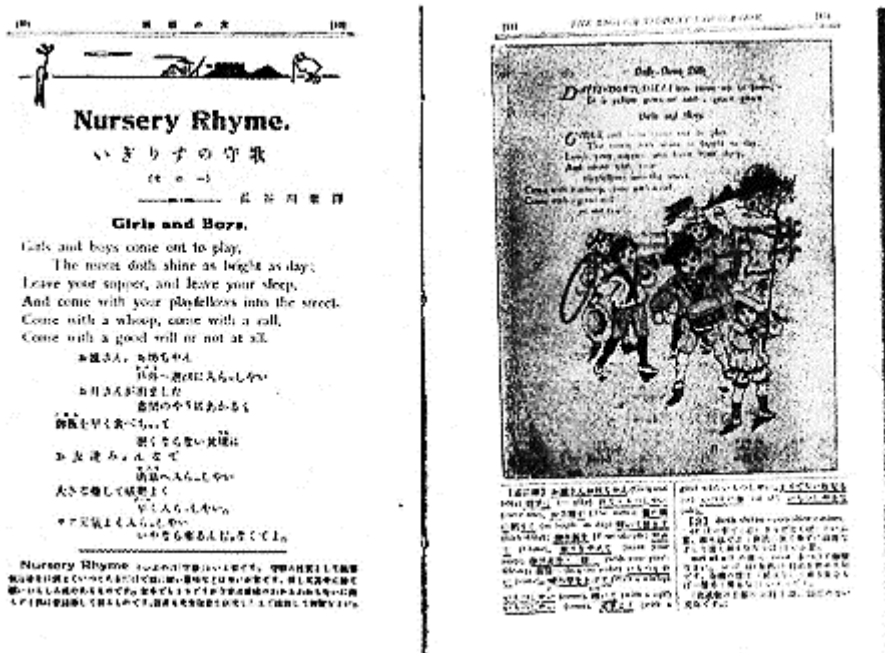
イギリスの保育園や小学校低学年のクラスでも、授業時にマザーグースを‘chant’している、つまり歌わずに強弱リズムだけをつけて大きな声で口ずさむ光景をよく見かけました。英語のリズムをつけて声に出すだけでとても楽しく、子どもたちも生き生きと反応していました。

このようなことから、英語の native-speaker たちは、楽しく英語を身につけるためにマ

ザーグースを‘chant’することは当然であり、英語能力獲得の上で大変有効であると考えていることが分かります。

しかし明治から大正時代にかけての多くの日本人英語教師にとり、英詩は教えにくい教材であり、マザーグースも例外ではありませんでした。正則英語<sup>34)</sup>の教育を受け、英詩にも理解の深い教師なら指導もできたでしょうが、英語教科書の直訳書や参考書には「キラキラ星」の章のみ削除されたものが複数あることや、大正時代の英語雑誌の記事に「扱いに戸惑って英詩をとばして授業をする教師が多いことへの苦言」や「ナーサリー・ライム指導法」が散見できることは、音声化された英詩の魅力とその教育効果が理解されていなかったことを示しています（註 31、p. 151）。

しかし少数ですが、正則英語の教育を受けて英詩にも造詣が深く、英語雑誌などでマザーグースを積極的に取り上げた教師たちもいました。斎藤秀三郎門下生の長谷川康は、そんな一人でした。正則英語学校校長として明治の英学の一角を担い、英語辞典編纂等でも有名なバイリンガルの英語教師斎藤の下で本物の英語のリズムや音をたっぷり浴びていた長谷川は、母校の正則英語学校や開成中学校の英語教師を務めるとともに、英語雑誌の編集者としても活躍しました。



資料 15 『英語の友』第 3 巻第 1 号 pp. 10-11

「易しく面白くそして正確詳密に英語を学ばせる」との英語教育に対する信念の下、明治 42 年創刊の中学生向け英語雑誌『英語の友』の編集主幹としては「学校では真面目に教科書で、家庭では楽しく『英語の友』で」と発刊の辞を述べて、楽しく学ぶ教材として「Nursery Rhyme. いぎりすの守歌」のコーナー（資料 15 参照）を設け、クイズや公募英文和訳の課題にもマザーグースを使っています。

長谷川の素晴らしさは、マザーグースの音の魅力をよく理解して教材として使い、指導していたことです。語句や文法的なこと、強音節にストレス記号をつけるなど読み方に関する  
こと、詩についての文化的背景はもちろん、時には挿絵に描かれている外国の香りのするもの  
についての説明を加えるなど、細かい心配りをしています（註 31、pp. 153-55）。

日本では英語教育の黎明期から今日にいたるまで、この長谷川のようにマザーグースの  
韻やリズムなど、その音の魅力を十分理解し、自ら体現して英語教育に生かしている日本人  
教師の例はまだまだ少ないように思われます。マザーグースの解釈においても、紙面上に表  
わすことのできる韻律構造の分析や文学的考察のみにとどまることなく、実際に音声化し  
た際の韻の響きやリズムの心地よさにもっと注意をはらうべきではないでしょうか。マザ  
ーグース理解や解釈を一段と深めるには、そのような観点を大いに加味した考察が増える  
ことを期待するところです。

※ 本稿は中国四国イギリス・ロマン派学会の『英詩評論』第27号（2011年、pp. 37-57）で発表したものですが、2019年にマザーグース学会の公式サイトで公開するにあたり、ページ番号ほかに若干の修正を加えました。

### 参考文献・註

- 1) Betjeman, Sir John, "Forward", Purnell Publishers Ltd. (Ed.), *Purnell's Book of Nursery Rhymes*, Bristol, Purnell, 1984.
- 2) Opie, I. & P., "Introduction", *Oxford Dictionary of Nursery Rhymes new ed.*, Oxford, Oxford University Press, 1997 (1st ed. 1951), 1-43.
- 3) Hancock, C. R., "The Singing Tradition of Nursery Rhymes", *ODNR*, Oxford, Oxford University Press, 1997.
- 4) Holmes, M., "A Christmas Box" 『オーピー・コレクション 復刻マザーグースの世界 Part II Best Selection 解説』 ほるぷ出版, 1996年。
- 5) Hook, J., *A Christmas Box*, London, Bland & Weller, 1796.
- 6) Rimbault, E. F., *Chappell's Nursery Rhymes* (中表紙のタイトルは *A Collection of Old Nursery Rhymes*), London, Chappell & Co., 1864.
- 7) Elliott, J. W., *National Nursery Rhymes and Nursery Songs*, London, Novello, Ewer, and Co., 1872. アメリカ版: *Mother Goose, or, National Nursery Rhymes and Nursery Songs*, New York, George Routledge and Sons, Limited and Novello, Ewer, and Co., 1872.
- 8) 鷺津名都江 『ようこそ「マザーグース」の世界へ』 NHK ライブラリー 215, 2007年。
- 9) Leslie, H., *Songs for Little Folks*, London, J. B. Cramer & Co., 1885.
- 10) Russell, M. A. B. & Greenaway, Kate, *The April Baby's Book of Tunes*, London, Brown Watson, 1900.
- 11) Moorat, J. & Woodroffe, Paul, *Humpty Dumpty and Other Songs*, Oxford, Basil Blackwell, 1920.
- 12) Crane, W., *The Baby's Opera and The Baby's Bouquet*, London, George Routledge and Sons, 1877.

- 13) Newell, W. W., *Games and Songs of American Children*, New York Happer & Brothers, 1888.
- 14) Gomme, A. B., *Children's Singing Games, second series*, London, David Nutt in the Strand, 1894.
- 15) Moffat, A. & Kidson, F., *British Nursery Rhymes*, London, Augener Ltd., 1904.
- 16) Le Mair, H. W. & Moffat, A., *Our Old Nursery Rhymes*, London & York, Augener Ltd., G. Schirmer, 1911.
- 17) Le Mair, H. W. & Moffat, A., *Little Songs of Long Ago*, London & Philadelphia, Augener Ltd., David McRay, Publisher, 1912.
- 18) Buck, P., *The Oxford Nursery Song Book* (3<sup>rd</sup> ed.), Oxford, Oxford University Press, 1984 (1<sup>st</sup> ed. 1933) .
- 19) The Cable Company (ed.), *The One Hundred and One Best Songs*, Chicago, The Cable Company, 1913.
- 20) 鷺津名都江「マザーグースの音楽」『オーピー・コレクション 復刻マザーグースの世界 解説』ほるぷ出版, 1992年。
- 21) 鷺津名都江「日本におけるマザーグースの夜明け」『學燈』Vol. 97 No. 6, 丸善, 2000年。
- 22) 鷺津名都江『わらべうたとナーサリー・ライム 日本語と英語の比較言語リズム考』晩聲社, 1992年 (増補版1997年)。
- 23) エ・エル・ハウ『幼稚園唱歌』発行者 今村謙吉, 1892年。
- 24) 鷺津名都江『マザーグースと日本人』吉川弘文館, 2001年。
- 25) Willson, M., *The Second Reader of the School & Family Series.*, New York, Harper & Brothers, 1860.
- 26) Sargent, E., *Sargent's Standard Series. The Standard First Reader Part two*, Boston, John L. Shorey, 1872.
- 27) T. Nelson, and Sons (ed.), *The Royal School Series. No.1. The Royal Readers*, London: Edinburgh; and New York, T. Nelson, and Sons 1875.
- 28) 川戸道昭「明治のマザーグース」『児童文学翻訳作品総覧 第7巻アメリカ編』大空



- 社・ナダ出版センター，2006年。
- 29) Sargent, E. 『英吉利幼學 初編』 自琢齋蔵版，1866年。
- 30) 浦谷義春(訳) 梅本為重(訂) 『英學捷解 一名リードル獨學』 華浪合書堂，1872年
- 31) 鷺津名都江「マザーグースと日本——幕末から第一次マザーグース・ブームを中心として」『図説 児童文学翻訳大辞典 第四巻 翻訳児童文学研究』 大空社・ナダ出版センター，2007年。
- 32) 八雲会編『小泉八雲父子練習帳』 八雲会，1991年。
- 33) Lang, A., *The Nursery Rhyme Book*, London, Frederick Warne & Co., 1897.
- 34) 内容理解に重点を置くために漢文素読式的な読み方で，音声面には注意を払わなくともよい「変則英語」に対し，発音など言語の音声面を大事にし，日本語に置き換えなくても理解できる英語のこと。